

# 安岡正篤（やすおかまさひろ 1898～1983）の処世訓

古今東西に処世訓は多いが東大に法学を学び、卒業後は陽明学者として、また思想家として大成し、終戦の詔勅草案にも大きく関与された氏が示す処世訓「六中観」は輻輳する今日の世界にあって、殊更に高齢者にとっては指標にも似た珠玉の言葉として映る。

この正月に図書館にこの関係書4冊借り受けて読む。なお理解し難い多くを残すが氏の人間性やその鋭い指摘や論理には大いに感銘を受けるものがあつた。米寿を迎えた私の記念と報恩の一端として当会誌に「六中観」の概要のみを記載させて頂きたい。

## 「六中観」

- |           |                 |
|-----------|-----------------|
| 1 「忙中閑あり」 | 注 本当の閑を指す       |
| 2 「苦中楽あり」 | 〃 本当の楽を指す       |
| 3 「死中活あり」 | 〃 身を捨ててこそ浮かぶ瀬あり |
| 4 「壺中天あり」 | 〃 心休める自分の世界を持つ  |
| 5 「意中人あり」 | 〃 心の中に尊敬の師を持つ   |
| 6 「腹中書あり」 | 〃 座右の銘を持つ       |

この処世訓を一口に云えば、心の豊かさの上こそ豊かな生活が得られると云う。その心の豊かさは心のゆとり（1、2、3項）と自らの世界（4項）そして向上心（5、6項）に依って得られると云う。

心のゆとりは厳しい環境にあってこそ得られることを1、2、3項は述べている。

自らの世界とは、マイホーム 家族 友人 健康 信心 教養趣味などを指すのであろう。

昭28年卒 西川三郎

